新新教句集 雜

類題發句集雜部

蝶夢編

恋

恋

夏痩とおもへば秋を泪う那　季吟

笠の雫撫でく待萩の姿かな　芳樹

寄不遇恋

他さりく〳〵後ぬ夜うれ　発貢

衣〳〵戎葵見たりて戻りり　冬松

契りあはば廓よ蔦色風巾　我黒

[illegible]　　板東
宝二丁の月ふる枕ゆめ[illegible]　　文淵
故郷をうく[illegible]　　長虹

逢恨恋

我恋やにあ[illegible]　　畿雪
[illegible]　　、

侍恋

[illegible]　　言水

寄梅恋

[illegible]　　飛坡

[illegible]　　大会来
[illegible]　　、
[illegible]　　小春
[illegible]　　曲翠
[illegible]　　その
[illegible]　　和及
[illegible]　　冰花

河〻会や屋の内入の路の雪　冰花

苔衣夜夜我家入恋ハ思ひ寄くるう　鋤立

男なる女嘉兵ハ夫も入ハ切焼ら　花咲

後朝の文

苔衣夜〻貌ハ袖の重きかれ　信中女　織妻

佐〻見る月ハ用ひるとかしや　山川

小夜衣会ハ恋ハ屋の白焼ら　李由

扇打ふるよりかりし化粧れ　尚志

さまよ秋や寝ぬへと待ぬる　壺中業

相ひひ火焼とぬるいかれん　舟象

侍京

夏屋我庵参るし見ぬん　荷弓

閑居陽出

秋ひとり琴拍子て夏夜祭　〃

恨ミ寒に扇引ち火焼ら　蛙美

夏寒ハ涼ひ涼ひ涼ひ涼ひ　壺平

待ちかしや縄の涼ら我たてくに　蛙水

歌言出

義重ら八我ら君ひ夏ら時　〃

秋やう文や彩〻地ら君ら新　枝候

志ぶか夜の鐘たそと聞水鶏哉　千那

雪くの待方とつる水鶏哉　若葉

別恵

更る月送りしに角を女あり　旦藁

恐意

さく花やかるる友ちぶ志乃恵

散るこゝろ春てふ蝶の廣さ　浮梅

送別

乙州の東武に成送る

梅ちる菜ばかりこの宿の汁　芭蕉

風深さ佛ぶかを

高ほ山小夜の中山ふてきめ

いく人何うしかちぶ馬の鈴

ちるこゝろ義の中ぶる寒ぶ

皆良ハ後ぶ成病さくたらしあるこゝろ

まぶらの出消ん笠の雪

支考来り餞す

仕舞ふて花も見すてる器一具　芭蕉

裏の種蒔たうにつる瓢哉　〃

孤屋桃吉来り訪ふ

ひとく人遠ひて　玉川

雲かすみ伊賀の国まで見えもせず　耿坡

月よりも物忘つる馬茶屋　耿水

老いくたびれて秋のやつれ　舟象

支考の公案を刺刀にくくりて渡りけり

新法の磐石人遠き秋月夜　桑袋

悔恨子より渡国送るとて

餞るとき文書へて去る蓋　自笑

義の古びより帰る我送る

木がらし秋はしらずとも　風雲

桃隣去来に別れ送る

虚空我引くもやはり巾　〃

ほうもやもやの鶴の羽根　岱水

別儒

ちる時花やさくらの花　戴人

義の忘れさくらおれ　〃

木曽路古さとへ帰りけるに

見をさへつゝ中に旅ゆく徒月　公来

立時ハ忘れやせむ扇かな　霞艇

旅つゝのさらばなみだやいとやすし　大学

乙郷か妻へ行けるに

見さふ夜さへ入らひ旅や富士の雪　貂月

なからへて杖にすがるや秋の暮　一井

居ながらおもひつくして何の里　支考

分け入りてひとも知らぬ秋の風　、

雲ながし次は我が身に尽くるか　嵐蝶

大名氏の氷踏まぬ先にわかれ　杜國

探吟に来りて時に寒き命哉いかなる

燕も替りて古巣哉たましひ置　正秀

送りてやひとり飲み干して一酒　利合

山川といふもやはなれ忘れ雲　北枝

蓮二法師送別

青柳の下や解きて流るゝ何処へ　乙由

留別

山桜や弓張魚の白毛湖　色蕉

送り状つゝまれて八木屋の縄　〃

山桜ゝふりの人送りうゝ　代支倫

寺作りにあよ弟そゝて

抽出ゝ扇引さく奈岐乳　〃

弧竹尾ゝり芳飛へ松立ゝゝ

代角小戦ゝ礼ゝふゝ乳郷　〃

舎爾送り寺作ゝり

短夜の名残や鮒十ゝう梁　支考

鄙に奇ゝ文成ゝ婦ゝ文衣　〃

家宝や用植の公ゝり沖ゝ切　〃

花ゝふゝ鄙ゝゝて

りゝゝゝだゝあれ卵ゝゝ義の京　嵩良

春ゝゝゝ花ゝて寄ゝ大根引　涼菟

家端ゝ跡へ砂地の名残ゝ　〃

吹ゝ引て旅ゝ家秋とゝり尾　素丸

雑度の尾戎立生ゝゝゝ

いゝゝゝれ松ゝ尾家菊の高　路通

京我出家府人に日の国よりおくり
物をおくり侍りける時に
保川の長をおくるとて
木こりや谷のひゞきも不二嶽　許六
三吹の下もゆく三輪の板　乙由
宵まで雲の絶間や出まくれ中　板右
雲と雁や雁や出まくれ中　唐元
雁と雁の留を鳴るそたらく　雄爽

羇旅

花の笠詩作る旅案内　芭蕉
一ツ抜くくらくらと頭巾衣の
雲雀なくとよやとらふ峠の郡
ほくくりや馬と氷ふ新法師
夜明ぬ月の山の茶屋
きくし物笠高く茅蘭を乾ぶ
帷子ほあくまうの月日の出ぶ
おらくくと出立の宿の下　文蓮

[illegible]

長寿は旅愛のこころ　　玄来

[illegible]　　弄七

[illegible]　　冠英

[illegible]　　治徳

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]女　ちゆ

[illegible]　　芳良

[illegible]　　治国

[illegible]　　治荷

[illegible]　　涼蓋

[illegible]　　卧高

[illegible]　　龍次

[illegible]　　許六

[illegible]

[illegible]

[illegible]　　[illegible]考

秋風の吹きいたく桐の葉
初ちりやすらふ桐の葉
る吉の戸たたくなるの音
旁もれく桟を用も塞れも
寄せ〜桐の葉ちる庭の
夜の中に木の葉ぬ雨や鶴の音は
舟あてきやく氷る夜の船
さ寒や柳もさもさめ柳の岩
夕ぞとの大気の一ちるり
風の吹のそ〜きり為盗ちり

支考
、
玄梅
越人
一有
荊口
秋風
宜来
傘下
仙杖

梅の鳥や夜明の鳥のいさこ砂
夜の〜ちよ食とく者をのや冬
山中に入海〜く
寒ちやさやかに幾日を蜜風
南部よりをあえて
まれ茶のうめい所うく花や春雲
木もひろんや岩を雲の数さを
大気の通り通りり秋の松
伏見の夜舟ふく
ばのうかに乗為の歌和歌ら

孤屋
冬松
惟然
、
、
和及
臨風

あてもなく流れてうつる秋の空　孫風
煙草やまき出て雲も不あらし　万子
旅人や絵うり合もとく不破の月　木因
ほを伸てとく長生を養う馬哉　子郷
今宵名月風呂もたく衣うつ　乙由

鶴子の岩ずりて

夕顔の蛇新しうしたりけり　蕉雄
皮付岩枕あてくふ夜長哉　子郷
かくもまや寒山拾遺ねさへ　相雨

名所

元朝の月ろ抱ろ見不二ろ山　宗瀘
見ゆ〳〵ときから花のすゝ山　貞室
地をうつ木の月ろ見ゆ岩躑躅　春吟
富士の山消ゆ〳〵ゆ雪ゆ　湖春
三月晦日ろ見ゆ雪ゆ　友静
富士よりく三月七日八日ろ　信徳
幸崎の雲ろ花ろ掛ろて　芭蕉
象潟の西ゆ西施ろ初ゆ

かたつふり角ふりわけよ須磨明石　芭蕉
さみたれを集てはやし最上川　ゝ
招の都の古跡芳野ゝ望　ゝ
田一枚植て立さる柳かな　ゝ
五月雨にかくれぬものや瀬田の橋　ゝ

芳野にて

花さかり山は日ころの朝ほらけ　ゝ

伊賀の国花垣の庄はそのかみ奈良の八重桜の料に附られけると云伝へはんへれは

一里はみな花守の子孫かや　ゝ

六月や峯に雲おくあらし山　ゝ
鎖あけて月さし入よ浮御堂　ゝ
早稲の香や分入右は有磯海　ゝ
目にかゝる時やことさら五月富士　ゝ
菊の香や奈良には古き仏達　ゝ
棧や命をからむ蔦かつら　ゝ
星崎の闇を見よとや啼千鳥　ゝ
居るさゝ名残の田面や霽しの雨　ゝ

隅田川にて

烏帽子着て舩頭ハ咲し都鳥　其角

須磨の浦にしみるは何がしかんに寒る　季角
日しの入輪を二見能や大井川　、
蕣露慕て春をすゝる御來山　嵐雪
那く宮にて
嶋瀧中の滴りきくく龍の飲む　、
大宮や鳩の出てくる井ふ春の月　丈草
北嵯峨や町も古めく萩の頃　、
きしの山又ちるさくら花咲くら　去来
紀伊のさくら見し坂まで從来の咲丸を留めて
奉加し道の修理哉きく見れハそ芭料足

つくしまの鹿のはかしく古つ男傳へ　、
傳へきくともし汲や五月雨　凉菟
宮嶋や廻廊十夜の明かや月　、
丸亀ハうて贄目や須广の秋　、
越後にて
人しして歎きつゝ浪に冷しや　、
阿漕にて
鳴ながら阿漕しくと啼くの浪　、
木曾路にて
山吹も巴も出る田植かな　許六

八橋や田さくらの有るく時雨　許之

宇津の山のふもと

十もとのさくら小雨よりもなほ秋の色　〃

西川の紅葉やくいみ〳〵　〃田の大夫

裝束つくろひまさりて出る

うの花や我かさに開のうし嶋　曾良

雲時や鶯たゞ啼おく　〃

大〳〵やら〳〵の裏の花衣　〃

如月の浦

五〳〵月雨さ〳〵　竹男波　弟十一

高人のひらう寂寞〳〵高飛山　天子

麦〳〵や内かも外も志賀の里　重之

子津

嶋田もるゐ乳母の名こそ　尚白

道さ〳〵に名賀の名所の乳　〃

武蔵野や幾ほとゝぎす乳母の　舟泉

かゝ嶋やうの合せく神れ　徳友

嶋市屋遠りさ乳比良雪寒　支考

歌出らる軍出の山　〃

焼畑や〳〵くさる山彼岸　〃

双林寺東阿弥陀堂

名月や絵ときたへしうら東山　支考

夫飛来三度四方の初雲　秋坡

蓮摘や部屋しめ合ふ紅の花　竹木

遊子撫の禁を通る

引ぬいや山をまきうて秋らつる　万子

立原寺ふる

青苔を我庵まもる水うつ　〃

西水の雲まて

山吹を咲うく地を外まる　宛爽

枯芦や雑波へ仏ぬきうる波　〃

さを鹿ぬよ〻ふく野の月我宿　〃

安倉の関少て

雪の義立の滝中とうもうて　晩山

乃仁高うるべかしやすうの秋　言水

稲立やさるまの一文字　岱川

きんぐ〻に結子の答て銭通　木因

すゑの人よく活りの婦のれ　調和

當麻うて

衣の文ぬうう織女死原　その

木がらしに次ぬく声や鏡山　北枝
蓮坂や花の梢に車引　知月
似合しき茶子の一章や須磨の里　杜國
八重霞書まて尺くる詩四ぬ　〃
不破の関うりく
月新てつゝ八雲とる月つゝ　如行
六条河原の蕎麦ふく
姫蕎麦よ若のつゝる茶子哉　志水
道成寺うりて
すゝの涙のつゝ来ぬる哉　芝柄

はしく来てゝ雲の峯今のゝ比叡よ仰ぐ　梁雲
孫くりや嶋嶋ゝ浮世あ原社　雲敬
白きくのもて八岩戸の鳥哉　其該
手かりよ写へゝ若ゝの清水ゝ　乙由
高野山絶奇　〃
我国ゝ素ゝ尺ゝく涼さを　〃
志ゝ女火や流の涼ゝ雪ゝて　唐元
夏手よのゝ世ゝのゝ妹ゝ作ゝれ　免士
那谷寺うりて

今入さし石にかゝりし秋の雲　希因

もゝ立や海よ一筋青あらし　雲程

俗ゝくおんなぶかの夜舟の篝月　麻父

出羽大沼の浮盃ふく

野ゝ道へ引ふく咲つくしぶ　塘雨

哀傷

人の子の分ぬけうりの武蔵哉　貞室

虫の声武蔵の法師ちる夕べ　李吟

仏はとそゝさ光くゝ高くれ

人みなのつくゝ

さを淀傍防人も菜みゝく　方山

千ぢの方ちりるとゆて去年の浮人や　芭蕉

為れ人の小袖も今や古風

りまくへよたとへん涙ふる夜形ぶ

塚も動け我が泣く秋の風　芭蕉

蜻蛉やとりもちの糸の長き枝　〃

義経堂　焼香の煙ひ乳　〃

花毒貞の方ゆうりくこと同く

数多くの人の見られ参りひとまとまり　〃

出羽の長谷の旅中にて

当帰よりも長い嫁のすがた　〃

養子の稲妻やひとり掬の水　支梁

妹のもとまかりける

その上を越えて消ふ蛍うれ　玄来

中秋の夜猶子を送葬し侍りて

加茂夜叉月も見えぬ那谷寺　〃

李下の書りおくりを

寒れぬるやかくて冷ゆく北枕　〃

子に教へ侍りて

仏〻頭のあるを出て見れば一鉢　落梧

母をうしなひきりの長きを

葬れ子やひとりぬ寄る秋の乳　尚白

嬢我義を出て

秋の詩　去ぬ蕎麦を落る影　〃

義伊寺に墓を建時

かなしさを筆よりかくまぼろしの抜毛哉　其角

抜うしなふ涙のとかぬうちよ消えうせ　嵐蘭

おきぬ哉いくさ

世をはかなみ麻衣の袖も乾かれず　悔改

義仲ちの姫とりひさぎつさく

代下にうく脱ぎうん雪佛　花雪

墓の子哉ふしたかひく

墓の義氣の遠ぬうう先へ　素山

曲翠の見哉ふくみく

呼郭多たくく蛍のさうぶ　文字

元妻法名月桂尼

妻の中哉扶桑うれ

妻ひり哉ふくくとくくく

ふへ新多くうく妻よ続ぶ　木因

七月十五日ひり法せしりくくり

墓よ死ぬ仏の中妻佛うれ　翁月

人の子ふしあひりに

あさ哉小広く兄ぶ奚う鄙　荷号

老ちゝはゝの墓にまうでける

いさらゐや我身さかりの月の欠　牧風

孫を抱き子を背負ふ後やとゝ三日月ふ[illegible]

有明や雛[illegible]の花　猿雖

来山ゝ老母の死を悲くるふ

ひやうしやうの秋さへくれぬ　乾黄

老母の方まうでる夜

きくの秋よりの月を愛して歌まて　、

芭蕉翁の忌中七日くとゝ[illegible]

芋くの野ひやゆゝ積る雪　文考

出羽の国可吳尼の郡に移りすむそのの二月花荒の時　、

病中八月死せし時

ちゝはゝ追ぬく死出の雪ぬ　玻城

栗の実ゝまよふくや一七日　藤英

お年ゝ[illegible]

蘆弧[illegible]くたゝへもの　乙由

[illegible]可風の後ゝ

秋出ゝ先へ[illegible]栗ちてさく　文素

懐舊

高野山にまうでて雑子の部　芭蕉

父母の墓まうでに高野山に登りて

太田の社あり　実盛の兜武具あり

むさんやな兜の下の苔の露　〃

蓼刈る　高野あり

蓼喰ふ　兵もまた蓼喰ふ　〃

故郷や　浮吟この句をうけて

さまざまの事思ひ出す桜かな　〃

古郷や臍の緒よりまとはるる　〃

順礼の子らが手にふるる小督の局の信濃路の秋　〃

朝長の墓うせて

うらやまし君が世にあふ蓼の露　〃

三月六日大坂の討死者追善句

吊ひくる

大坂や乃ち夏の草の夏九十年　浮吟

赤間宮年々一夏京都にて

せきぬ風くるるあるく秋の平家　涼菟

西行上人五百年忌

連翹やその望の日の忌日かな　　胡及

亡友芭蕉居士近来山家集の
風躰を感じつゝ常に机辺に追悼す
此集を読誦せ

危さや附ても〇の山家集　　素堂

芭蕉庵にて

欺くく駕をさらに姫の哀れ　、

大坂討死五十四年忌

首くも名二度出る表戟子　　許六

芭蕉翁三回忌

月雪よ掛しうけし誂子乳　、

深川芭蕉庵跡を尋て

豆腐屋も越しの庵や梅の花　、

葛戸の備前男の様かく

生て居て何を風附田植時　　支考

加賀の金沢寺八幡にて御の越し

夜探く紅やちへ花の影をといへる

その上郭木陰で跡もしくて

青梅袁ちる紫の秋を　、

葉さゝぬ母の代をよ海まさは　明水

芭蕉庵の高き枝尺る

すゝ[illegible]の葉小端波ひゝ[illegible]ゆゝ　曲翠

我伊達の廟よりふるゝ

笠揺く時を先く鶯や時雨　北枝

栄枯易地

大気の字は桃書相れ　二秀

高雄頼朝

和の花よ高尺ゆ多賀ゞ　當良

市原野ふく

屋敷やゆ小川ゝ青の尺半さ　約雪

河内部寺少く或房表表ゝり

泊ゝれのさゝら形ゝ成尺ゝ

摘表遣ゆゝれ　牡丹れ　英翁

お揺表夫磯ゝり西ゆ三人ゆ有に

ゝゝゝく蛙ゝ清ゆゝ八蛙茅表を

ゆゝ[illegible]れゝゆゝ時

鳴ゝく　ゝゆ地と何ふゝ　三子義

古戦鳴ゝく

さゝかにの殺て義ゝ蛙一業ゞ　乙海

[illegible]武蔵の坊賀上人[illegible]奏[illegible]

此塚も探り出の苔の苔もあはれ　　春因

[illegible]食[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]　　乙兒

[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]　　[illegible]

述懷

うき世の岡の崩るれ身のちりの出　　湖春

大かたの月ともめでて七十二　　任口

人を見ぬ世を遠くや遠く見ん　　芭蕉

世をかくるうくや雪の枯尾花　　〃

此秋を何とせとやと雲り空　　〃

在我焼り代のくふ田のひ戻り　　〃

世をうへや嶌は養あてしあ[illegible]の砌　　〃

松よ春て[illegible]枯野さけめくろ　　〃

多歴しく友りのふ

冬風や生にの八郎新の墓　芭蕉

古足袋の四十三年を端こゝ及　嵐雪

ふもとあけく中の作らるこゝろ

衣服ゝらう和ふも乃くぬ妨きゝ

かくてうかるきゝゝゝ千菊　、

病中　警水

り燈の灯も乃毛も芳乃

義立る力やなくて菜ゝけ　、

ゝ乃事の追へまゝく妨者稼　新蕉

峡山

新歌の稽とゝ新人者公、の郎　和及

芭蕉翁の塚よまふて乃ゝ飛分を背ふ

塚寒や塚ゝゝ外ゝ伝ゝゝ　丈子

雪ゝゝゝ月の上城鳴かゝ走ゝ　、

家ゝ焼ゝ焼ゝ

焼ゝ当ゝ梁ゝゝ花ゝ敷ゝ　北投

鴨峠や弓矢を捨ゝ十三ゝ　太来

ゝ者武ゝと指やゝゝん武あれ　、

義賣ゝくゝゝ八ゝ抱ゝ月乃人ゝ　正秀

ゝゝゝゝ前ゝ川も話ゝ表の墓　、

手らふしたる所もかるくて所うしも　翁月

我身かよく病のもあり凡八盤けつ八人も

もみ川うつくしと撰戦うくく

笄も揺るもすくしやちう揺　紀行

秋の田やさかり雲くく稈二俵　尚白

寒う身よ蛸風吹くし親二人　瓢賀

手庭を捨てく出りう附

清う附る氷も流くはうく　路通

我の色くく廉戦出く風巾　妙

芳肥きて廉あくう九菓稈さ　裏柳

社美の川乃九井を沢かう　紫雲子

今年世戦たる出り北や冬の種　旦藁

厚姫寺海夏の酒債と訊ひう　千那

投女ゆりかもうく

身戦世八八ちかもる蚊屋の蚤ぶ　言水

己斗の米九乃九に稼戦打り懶

長くく投くそうや花蓑　許六

初雪ゆ寺く根くく雨三年ぶ　雲鼓

四十粉読の新米長寿ゆ粉る　朱拙

投ふ井三十まくて夜寺の秋　八橋

[illegible]　飛坡

疾瞬しつゝ病枕思つゝけりゆ[illegible]

洒壺の三四見つゝあうちまれも

[illegible]　、

病後

死去ちけ[illegible]を除る三月乳　扶蓉

焼中病[illegible]しく[illegible]ゆ[illegible]の

男[illegible]　、

[illegible]し[illegible]　支考

病中盆会[illegible]

[illegible]棚[illegible]池火[illegible]　、

[illegible]棚よ[illegible]　、

鎌倉建長寺にゆふべ

[illegible]　越人

[illegible]や[illegible]を忘[illegible]

[illegible]　、

[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]　蓮弾

三井寺の[illegible]月を[illegible]

人の[illegible]

[illegible]　乙州

[illegible]　除風

こうくやゆかりの中仕りける比

うら先しよ遊ふ苔を紫や高の夏　白空

山水さく先ゑまふひあり新しく

もりくてすて

[illegible]れた月見の友や若女蕎　[illegible]

海中

おもろくへの急まるくり面の蕎　可風

贈答

信章紀行にうつりまりたる

いやみ見ものくて富士を見ると同り　李吟

田植の歌

杜國ありあるく

鷹ひとり見ぬくれ山ここ城　芭蕉

義仙の書戦ゆよまる事哀尾

長等川の水橋あるく　〃

ひとあくうら同こ見ゆる拍こ乳海　〃

海さぬ我者ふくく称ちる也　〃

美濃路より李由が許へ消息のついでに

昼顔に昼寝せうもの床の山　芭蕉

その女が家ゆく　、

暖簾の奥ものゆかし北の梅　、

手拭をさらしや種蒔に居て　、

露沾公にて

西行の庵もあらん花の庭　、

涼しさを指図に見ゆる住居かな　、

秋の夜を打崩したる咄かな　、

やかうきん藜の杖に余の日足　、

蒸麦をもてなしくれし山家かな　、

翁我草舎にやどりし年の冬

折しも松笠を焼て落月夜　去芳

芭蕉翁を京にて先生しく勢うく

かな句とまうる時節も年の秋は　斜嶺

文句を孫子表切て譲きり　文字

翁老七回忌とふ月の雪ありあさ

猶無名庵に偶居して彼地をさへ

さらく主居去来が方へ申しける

餘寒や薬湯の後の菜編　、

うへし
殺氣や人参つみし墓のもと　李来
従兄弟の頬ふくらしけるに、
恕し哉一つ畑の風あらび
去年なりし文考にあひて旅枯会の
半ちかく大方はうかれけり
見ず知ぬ数も同し須磨の浦
返し
持ぬしの誰がかへしも樵そ
馬の口取る男の旅にて粟稗とる　支考

りね侘やとて身はかれし
旅の雲の粟田や比叡の秋、
神風鈸半成て尉あり鴻あり机子必らぬ
唇にされてくりしの寿　木因
幻住庵哉訪ひて
木啄の枯をつゝく住居かれ　曲翠
芭蕉の庵哉野ねて
我背食を椎の木もあり夜季笠
もしあくる菊哉やかしける夜　兎貢
裏に見旅寐に餞を着たや　如行

旅ゆり帰りて後の作

焼火まで遠く見えしかな　千川

霜ふかく冬木の梢うれ　素川

京なる人より申しけふ

一夜まて三井寺うつゝ神うれ　尚白

さもぬれ衣を着るとおもふ

涼風を出すかしこ被れこうれば　游刀

俳諧の因とのまゝ入るに絵ふ

り風出れ折りひつく梅うれ　牡年

伊勢の宗長より手紙を郭公に

萩芦の友達やけさ鳴くこゑ　舎羅

俳諧師の枕のうゝ紀を婚しう古へ

帰りて寄を詩にする程来きて

山村歌言の枕といふ木の節を徳人

木枕の昭やゆ伝承り郭公　文子

うつゝ

寝に又まて来たや初うゝ祝　俳諧

手紙をく姫りあり附

安祝りたく何とおふ古へ　〃

曲翠の桜樹を訪く湖水を望む出川

速やかなる春光たゝえしか　壬角

小枝茂手屋うりかくれて

かへ袖と思ふ人もうるゝ藤棠　句空

うくしく

夜昔けくるれば人の歩火燈　北枝

情多り太閤の名残語りもうし

京あらそのあらまほうしく

千年ふるやもし定家の詠りんか　舟城

訪源者不遇

食物を抽味噌の答ひつゝ　程己

相ちりる女幸の意住へ山あらんに中送る

萩萩るゝ窓ゝうる市を女郎宗　從吾

治平衣出林檎治り燈籠を戎

載の梓仙つり四ゝ

吸篠丈右橋ゝ保ゝ茂　乙由

涼巻ゝ茶居を弱く

子の仁りて二人を先ハ七ゝ海　尭士

画讃

三聖人讃

月花の中にうしやはあるとの問ふて達　芭蕉

気色の画しるに讃をうれと

鉢叩きを下るものあきへ気あり　〃

正威像讃鐵肝石心此人之情

杖ついて加賀の湖や梅の花　〃

小町画讃

さきさやと言ふ長日を笠と蓑と　〃

盤斧のうしろ姿なる像り

袁りくあふうんのうしろつき　〃

布袋の讃

扇の月や紫野中の月と花　〃

部屋にあらはれる像り

あはれ〜とはけふも休よ秋の月　〃

扇面讃

さく花やさく市我まぬく女房　芭蕉

侍女の画讃

傘持て月よ出くるすすき　〃

寒山の讃

夜ゝ思ひつゝ雪のうゑ食ぶら　文角

芭蕉翁の像の讃　二句

月忌の外ゑ用ひよ翁の乳　耽波

もゝ[illegible]保川ゑて冬籠まとらう保人

仏はけ[illegible]ゑ[illegible]ひ出く

冬籠まつゆ雪ゑ角やゑ[illegible]ん　、

猩子の讃

ちゝゝ子ゝ拍子やらん紙一ツ　文考

大江山の張り

せくき紀郎ちまを山さ九く　光雪

小町の讃

我恋を問ふも無もなほ花の色　、

拍女の張り

この方を背ふく居るを墨絵　宏貴

去歌小紫の姿張り

懐ゑ歌ゑ[illegible]ゑ表ゑ乳　立吟

亡海の西像とまつゝ写し耽波ゑ

送ゝ保川の庵の什物ゑ考附ゑ

髮の事無ゝ言の時弘ゑゝ　許六

葉を東下りの張り
什平[illegible]
八重さを出る屏風の面より　木因
[illegible]
扇をの搖出る扇より　北枝
搖[illegible]
競貴の讃
さ[illegible]扇の骨や秋の風　乙由
許六[illegible]の張り
什[illegible]の骨[illegible]　尭士

雜批四

三井涛賛
松より梅裏表社多岡さくら　白隱
富士の讃
六月や日本[illegible]山[illegible]　巴静
三保の松原の張讃
涼さ[illegible]すと[illegible]三保の崎　孔流

詩哥

弥陀山光法系の句より西行上人の哥にかりて

何の木の花とも知ぬ匂ひかな　芭蕉

七夕の夜風雨うけしかりけり　小西来

哥仙類ふしく

亭水つり星も旅寝や君が上　〃

苑蟲ら老男の仙哥ひゝ東山京案の影ゟ

かゝふ

一露も古角さゝ葉水ゟ兼　〃

花下忘帰因美景の仙哥

案入ゟ生拍子引寄せ忘れ花下　世水

夜来風雨後秋氣颯然新のふを

秋の雨ちるく瓜ふ人も新　〃

就中断腸是秋天のふを

雲の旅ゟ行て八月始表定　〃

一鳥不啼山更幽の仙哥

月の声八ゟ方ゟく案山子ゟ　凡兆

馬頭初見采囊花のふを

谷の堤上ゟけゝ表花　許六

宮花寂寂春深鎖　許渾

ふるさとの小路や門よ鎖さし

惜花不拂地の公式

見る僕蕊花り胡蝶もうしり　支角

晴香浮動月黄昏のつを

入れの書よりあり書ひくよび　風麦

八宮粉黛無顔色の公式

霄一責の綸つま消さや月の影　長紋

宮中拾得蛾眉斧不獻吾君是愛君の心を

花かゝり拙うくらく牡丹り　越人

一ぢもも南無阿弥陀佛とふ人者

蓮のうへりのゆめ多れの公式

荷り多り蓮多仏ぢ歌交く地ぢ　李由

月移花影上欄干の公式

月歌のひゝ指うもふ接うれ　不卜

次ゆ見と今多山や者ふゆ焼の

春き夫方しをうふりうて

出や井小花帳の中れ　夏火焼　丈子

雜教

古教忘り南無阿弥陀仏ばかり　守武

殺生戒

殺生戒を教さく教せ足らん　貞徳

本教者みな

弘風ばかり伝えそしれば力なき屍つま　宗因

丈六のかけうふ高一石の上　芭蕉

或所蔵示て曰ふ禅大底のりひとつや

祖素ばかりさふぬ人なるさく　〃

寺に泰さく諸教者月見れば　〃

明暗寺にやはらぬ月見そのつ徒の信心の板と

ゐるとこうろ底や法さくもろ家業　〃

矮取さくもろ同如度仏うれ　不卜

世常迅速

咲つもり仏祖妙法子の畑の数　金下

高歸りて

数花る繁さもちまう裏の流　杜國

妻の教八詩の初歌の堂蓮り　雪良

唱ふしも孫陀多文りかりまこ　玄梅

尼寺やしらく菜の花のちる径　言水

法隆寺より南無仏の太子を拝む

御稚のとうしるしあうあのこゑ　千那

内秘菩薩行

夕立ち過ぎて蟬ぶこうへ〜そろそろ来　〃

姫の菓八体像より菓うく乾仁亜式　拙芳

皆是吾子

似我蟬よ為ものなるとも彼岸ぶ　治徳

善光寺利剣寺〜時雨降る

鈴蘭を出くまく侍ほのう夜の月　文孝

竹畑や敬さつりまりて仏立世　こ彩

乗り品如子得母

体たく蓋さそろつく大角豆ぶ　胡及

同如病得醫

かたく時清水乃分数山路乳　〃

玄如寺ふく善光寺小来開帳の時

涼しくも那山ようりふ伝仏ぶ　李来

坂礼の時

笈掛りの卯のこさ部〜池彫山　〃

故如きへの中に声あり今仏侍　来山

一切衆生悉有佛性

盗人去跡なくこのやうなり　来山

前業所感

猫の爪なく因果歴　西吟

薬草喩品

百草やひとしなのふ春の雨　秋往

無慙愧

涅槃経ふるくなりぬ傍つた　落梧

深着世界無憂心

つゆ光とて執なき身火焼ぶ　風雪

煩悩あれば衆生あり

髑髏の上ぜ紙なく花乃乱　鬼灸

焼る火ゆ灰もちきせて去ぶ　〃

法華経

ぜんぜん切ちらす西風ぶ　西里

人道

辻うら執ぶ我ぶへや生魂ぶ　〃

一夏心地ゆ筆りく

手に物ゆ合点を解素ぶきて

食事ゆ花事とぶ乱　友秀

飲酒戒

仏の衆のうちにおもむくや　ことし

殺生戒

いうなとの虫死命戒凡略

法花八講の侍りに女房の聴聞所へ

急ぎ入るとて法華経の書写の事

龍女成仏のありさまを聞くに

ほうくとあるは鬼の音のしるべ　越人

三界無安猶如火宅

六月の行のなかばうち暮れ

草木国土悉皆成仏

老木の梅や　撫樹きるに仏色　丹波

隨縁真如

時雨ふる照るとて夏の色　丹野

法会終の日

有為の方々稲麦の主数その時　素堂

鉢の子に木瓜をうる法師　卜枝

小服袈裟ひらひらとやてき玉掛　角上

地獄

せまりまてゝ見もくるしみやあるべき　それ

法然聖人

嘆くあるつくろふべきなれ　熟くれ　前好

悪科のきらゝ〳〵ときやうや古扇　暮西

帰命阿弥陀佛

衰徳の尊者ほんの御ことれ　愛蓋

冥々ときれ仏の道り蔵菓　蓮之

故ときるりて

尼達の髪よ　梅ゆるるれ　希内

富士道

鶴の尾ときれて名ゆるのまぶ　乙由

六月の末高嶺山ときるまた

紙屋つゝ反もも浮世の道まぶ　盛吹

三界唯一心

五体ゝや憂一ゝ衣ゝ　千代

不楽閑浮提濁悪世

代里衣居いのゝ麦俵　蓮美

神祇

[illegible]　貞徳

伊勢ものゝ[illegible]賀[illegible]人[illegible]道[illegible]と[illegible]て
たまひし事[illegible]

[illegible]の嵐[illegible]　芭蕉

二尺の圖[illegible]作り
[illegible]の花も浦[illegible]春　〃

[illegible]田の社[illegible]
[illegible]　〃

高[illegible]山の禁を[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]水の[illegible]　明水

[illegible]や[illegible]水を[illegible]　言水

[illegible]女の尺[illegible]の[illegible]　荷弓

[illegible]の[illegible]の[illegible]大[illegible]

[illegible]の[illegible][illegible]

[illegible]秋の[illegible]　方山

[illegible]水[illegible]の[illegible]　龜洞

伊勢法楽

[illegible]の[illegible]の[illegible]一つ[illegible]　許六

住吉法楽

月花ゆ山ゝきてゆの秋くれ　許六
心西に西くもりぬ赤蜻蛉　飢渡
寒ゝ春やゆ住吉の跡の秋の切　丈芝
みえんくるの社ゆ西を祈ゝゝく
夕立や田も見めくるの赤のも　青角
淡路の坂本ゆを赤は雨を左ゝて
赤風の雨ゝて白へ裏表ま　除風
元日を法ゆ同ゆ乳ゆ赤代ゝ　淡石
陸きけ度中の夜ゆ春ゆ拍て　冬巻

度中やこゝに火焼の有建波　残月
伊の子やゆ山地家の二はゝち　蓼川
冬もしやゆ祖宜の花ゝ池ゝく　蓼梧
備ゝゝ赤そゝゝ拍今の春　と光
赤枝やきれけ見ゝ梅の色　我黒
つゝ山ゝく梅屋迴ゆ燕ゝれ　如泉
夕立や蓼ゝ備ゝく赤麦　乙由

備中吉備津宮

稜のもゝゆ市倉の出ひゝ士　意元

祝

夏歌祝ふて

祝ひ今盛せるふるえつの松　季吟

智恵の新葉ふて

とをかや花ちるこふ春日の桑　芭蕉

古木にかくれ居る人ひ

先祝へ春をきわ春冬籠り　〃

乙鳥詩を吾りて

人ま京ど笑をて我冬ふ〜〜元　〃

赤米の毎七十の年ごとの秋七月七日

こふふまさるた方桑七稙を歌こた

七株の桑の秋の木や星の秋　〃

星橋の刺髪へ醫門を賀ま

秋年に栖の刺〜歌の郡　〃

武士のこの代世長武祝ふて

笹の附ちちちち三つの中　去来

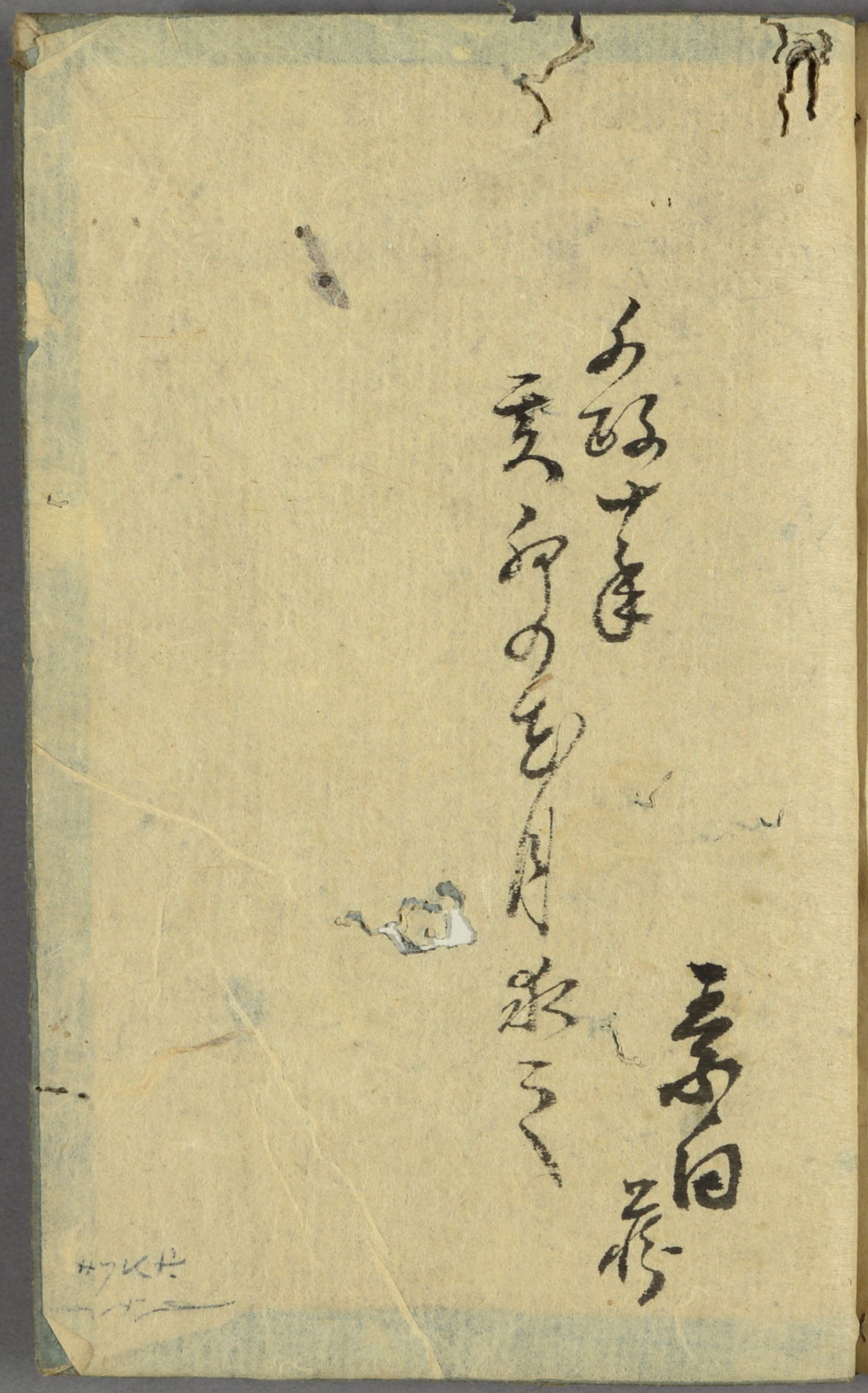
多ち春く米穢うふ動ちるへを賀こて

花を実も咲稲ま生〜米の姿　〃

千代の秋旬八ュ上ちち〜さ〜米　龜洞

於へ学問うりうりうる歟儒士の子うり
本第およりの事柄の若さうれ　許仁
駒梅飯せしく人戦ふるく
時をうらし犯ふ歟ちよ歟ちよ　酒堂
武家の家督お決有りる扶後うり
婚姻の仲接種の事情を考れ　方子
姉と弟と二人りの人子
百姓つふれと二男三男をれしうり
仕方をくしる事に

落花荷果敬ふへの家居ル　芳足
荷ふ四十の妻うり
我妻を仲そのまに人やる歟　雪五
紙お大村の何うしう商家の娘居歟ふく
紙つ形くふうの事しる歟　餘　飛坡
人への婚礼歟いふふく
ヨふ林の根よかふひうり孫ふ先　友秀
三ツ柄や鈍荷て付出ふ国の花　素林　重勝



安永三年甲午三月

書肆

西村源六
西村市郎右衛門
井筒屋庄兵衛
橘屋治兵衛

梓行